

大学の図書館

第43巻第7号 (No.608)

2024 7



目次

はじめての読み聞かせボランティア	柿原 友紀 ...109
特集：なかなか聞けないレファレンス事情	
利用者のニーズに応えるために：九州大学附属図書館の事例	工藤絵理子 ...110
ヒボクラテスの言葉を眺めながら	
小樽商科大学レファレンスよもやま話	河野由香里 ...112
レファレンスサービスを図書館業務として利用者に印象づけるために	
—久留米大学医学図書館で取り組んできたこと—	後藤可奈子、平山 紀子 ...113
医学系図書館における文献検索相談	
—研究者と図書館員の接点を考える—	諏訪 敏幸 ...115
熊本大学附属図書館におけるレファレンス協同データベース活用事例：	
調べ方マニュアルへの貴重資料関連情報の登録	廣田 桂 ...117
大学図書館の入館ゲートに関する照会とその回答まとめ	上村 順一 ...119
第31回大図研オープンカレッジ参加報告	磯崎みつよ ...121
議事要録	123

はじめての読み聞かせボランティア

柿原 友紀

コロナ禍が落ち着いた昨年、子ども達が通う小学校では、保護者による読み聞かせのボランティア活動が再開しました。ハードルが高く感じ、これまで参加したことはなかったのですが、子ども達のクラスからのボランティアが足りていないとの追加募集があったことをきっかけに、はじめて読み聞かせに参加しました。

子ども達が小さい頃は、毎日のように絵本を読み聞かせていました。その甲斐もあってか子ども達は本好きに育ち、自分で文字を読めるようになってからは、読み聞かせをする機会がなくなっていましたので、久しぶりの読み聞かせとなりました。

読み聞かせは月に1回程度、昼休み後の15分間に設定され、私は6年生と1年生のクラスで各2回活動しました。1年生は読み聞かせの時間をとても楽しみにしていて、始まる前から子どもたちに囲まれ、読んでいる間もたくさん反応がありました。対して、6年生にもなると読み聞かせにはあまり興味を持ってもらえないのではと思っていましたが、案外集中して聞いてくれました。

読み聞かせる絵本は、季節に合わせた絵本や大型絵本を選んだり、修学旅行先の長崎で平和学習

をしてきた6年生には戦争をテーマにした絵本を選んだりしました。事前に図書館で候補を何冊か借りてきて実際に声に出して読み、読みやすさや通読にかかる時間を確認して実際に読む本を決めました。その後、間を取る場所や、ページをめくるタイミングを考えながら、スムーズに読めるようになるまで練習して本番に臨みました。活動後は、クラスごとのファイルに読んだ本の記録や感想を書き、グループLINEでも読んだ本が共有されるので、他の方が読んだ本や活動の様子が伺えました。

小学校では図書室での貸出冊数が年間100冊を超える子も多く、読書に親しむ様子が伺えます。全国学校図書館協議会の「学校読書調査」によれば、2023年5月の1か月間に1冊も本を読まなかった割合は、小学生は7.0%、中学生は13.1%、高校生は43.5%と、成長するにつれて読書離れが進行している様子が伺えます。中高生は勉強や部活で忙しくなり、スマホに時間を奪われる中で、読書に割ける時間が減っていているのだと思いますが、小学生のうちに読書の楽しさを知れば、忙しい中でも本を読み続けてもらえるのではないかと思います。少しでも本好きの子を増やせるように、今後も読み聞かせに取り組めたらと思います。

(かきはら・ゆき／熊本大学附属図書館)

特集：なかなか聞けないレファレンス事情

インターネットで誰もが必要な情報にアクセスしやすい現状においても、図書館の存在意義を示せるレファレンスサービスを提供することが、利用促進の要であることは従来から変わらないのではないのでしょうか。

具体的にどのようなサービスを提供すれば、利用者のニーズを満たせるのかは、各館の事情によって異なり、また各館の方針にも影響されるかもしれません。

本特集では、4件のレファレンスに関する事例とレファレンス協同データベースの登録を記録としても活用されている事例をご紹介します。

レファレンスサービスの深化に伴い、より専門的内容が求められ、各館の対応も多様化する現状で、互いの考えや経験を出し合い考えるきっかけになればと思います。

(特集企画担当：九州地域グループ)

利用者のニーズに応えるために： 九州大学附属図書館の事例

工藤 絵理子

1. 私のレファレンス

私がこれまで担当してきた主な業務は、レファレンス、ILL、講習会、院生との学生協働である。その長いような短いような経験で感じた利用者のニーズは「彼らは本文を求めている」ということである。私たち図書館職員は、できるだけたくさんの参考情報を提供しようとするが、利用者は紹介された文献が「入手できるかどうか」に意識が向いているように思う。確かに本文まで読んでみなければ、自分にとって有益な情報かどうかは判断できない。

そこで、私の現在の担当業務であるレファレンスとILLで活用しているツールやシステムの事例を3つ、以下に紹介したい。

2. 事例1 (Backlog)

九州大学附属図書館には、メインキャンパスにある中央、理系に加え、医学、芸工、筑

紫を合わせた全5館がある。

中央、理系、医学には、レファレンスとILL担当の係があるが、芸工と筑紫は兼務である。さらに国立大学職員の定めとして、数年ごとの異動があり、特定の業務だけを極めることは難しい。しかしながら、利用者にはそんな事情は関係ないので、相当骨の折れるレファレンスが来ることも珍しくない。特に学外一般の方は「九大さんに聞けば分かると思って。。」なんていいながら難問奇問を持ちかけてくる。その時配属されている担当者の知識と経験だけでは限界がある。

そこで、コロナ禍をきっかけに図書館内で急速に利用が進んだツール「Backlog」¹を活用することにした。Backlogは業務を可視化して、チームのコミュニケーションの促進を目的としたプロジェクト管理ツールである。ここに全職員が見られるプロジェクト「問い合わせ対応」を作成した。その配下に、各館で受けたレファレンスを1つにつき1課題として登録する。そうすると、本学が長年蒐集してきたコレクションや特定の分野に詳しい職員、2018年のキャンパス移転前の図書館

(学部図書室時代)に詳しい職員、たまたま興味を持ってくれた職員などが情報を提供してくれるのだ。

Backlog に課題を登録すると、いつも想定以上の情報が集まり、やはり図書館職員はレファレンスに血が騒ぐのだなあと、同僚の皆さまに深く感謝する毎日である。

3. 事例2 (ILL無償化)

ここからは、レファレンスと切っても切り離せない、もうひとつの主業務である ILL の事例についても紹介したい。

ここ数年で当係が経験した大きな変化が2つある。1つ目は、ILL 取り寄せ費用の無償化²である。2020 年度より、論文等コピーの取り寄せにかかる費用を大学全体の予算から補助することとなった。これまでは申込者の負担であった同費用が一定の条件に基づき、全学の経費による負担となったのだ。条件付きとはいっても、ほぼ全ての依頼に補助予算は適用されている。

複写依頼の件数は全国的に減少傾向にあるが、本学はこの予算の適用により、2020 年度以降増加が続いている。2019 年度の実績件数と比較すると、各年度とも 1.5 倍～2.0 倍の依頼件数がある。

4. 事例3 (RapidILL)

2つ目の変化は、RapidILL³の導入である。RapidILL とは、1997 年にコロラド州立大学の図書館が未曾有の洪水被害にあった際の経験から、迅速な文献入手手段の必要性を感じた図書館スタッフが開発したリソースシェアリングシステムである。現在はクラリベイトの傘下で、世界で 600 超の図書館が RapidILL に参加し、相互に文献を融通している。

本学では、2023 年 11 月からトライアル、2024 年 1 月から全館で本運用を開始し、外国語文献の依頼を RapidILL に切り替えた。

主な特徴として、以下の3点があげられる。

- ・依頼した翌日には PDF が到着する。
- ・年間契約の定額制。
(1 件ごとの課金ではない)
- ・文献の依頼先はシステムが自動的に選択するため所蔵館調査が不要となり、相手館担当者とのやりとりも発生しない。

RapidILL を導入したことで、入手のスピードが上がったり業務の効率化が進んだりしただけでなく、これまで入手が困難だった文献の多くが入手可能となった。RapidILL を導入した効果は絶大だと考えている。

5. おわりに

いろいろと書いてきたが、レファレンス担当者として日頃から心がけている個人的3ヶ条を以下に掲げる。

- ・本文を入手できる方法を可能な限り探す
- ・質問にただ答えるだけでなく「なぜその質問をしたのか」を考え相手の真意を類推する
- ・自分の限界を認め、人様の力を借りる

特に最後の3つ目が大事だと考えていて、誰がどの分野に詳しいのか、誰に聞いたらヒントをくれそうかを常に頭に入れて最新の人脈マップを作成しておくことも、レファレンス業務のひとつだと考えている。当然ながら、相談相手は図書館職員とは限らない。教員、学生、学外機関等と話しやすい関係を構築することを日々心がけている。

参考文献

- 1) Backlog <https://backlog.com/ja/> (2024-06-13 参照)
- 2) 本や論文を取り寄せる (他大学等から) <https://www.lib.kyushu-u.ac.jp/ja/services/members/interlibrary-loan#copy> (2024-06-20 参照)
- 3) RapidILL <https://exlibrisgroup.com/products/rapidill-interlibrary-loan/> (2024-06-

(くどう・えりこ／九州大学附属図書館)

ヒポクラテスの言葉を眺めながら 小樽商科大学レファレンスよもやま話

河野 由香里

1. はじめに

大学図書館に勤めて十数年。レファレンスへの苦手意識がどうにも消えずここまで来た。しかしながら「お役に立てた」と強く実感できたのは、利用者に関わりながら苦勞して調査した事例ばかりであるということ、そろそろ、認めざるを得ない。

今回は本学図書館職員から思い入れのある事例を集めることができたので、そちらをご紹介します。紙面の都合で全てをご紹介しますが、本稿ではまず小樽商科大学独自の取り組みである「クラスライブラリアン制度」を取り上げたのち、調査に関わる喜びが感じられる事例をご紹介します。

2. 小樽商科大学

本学は北海道小樽市に位置する国立唯一の社会科学系単科大学で、学部生だけで約2,200人程度の小規模大学である。2022年4月に帯広畜産大学、北見工業大学と経営統合し、国立大学法人北海道国立大学機構の一員となった。1911年の開学以来「実学・語学・品格」を教育理念とし、2013年には「No.1 グローカル大学宣言」を行い、グローバルな視点から地域経済の発展に貢献できるグローバル人材の育成を掲げている。

3. クラスライブラリアン制度

クラスライブラリアン制度とは各学年担当の図書館職員を定め、質問、相談に応じる取り組みである。発足の経緯等は過去の事例報

告¹に譲り、制度の特徴と当初からの変更点を簡潔に説明する。

2012年に開始したこの制度は、図書館と学生相互の信頼関係に基づくサービス体制構築を狙った試みである。担当職員の氏名、連絡先を図書館のHP²等で紹介して質問を受け付ける他、ゼミでの講習等を担当している。開始から10年以上が経過し、細かな変更点はあるものの制度は現在も活用されている。

変更点をいくつか挙げる。当初は大学院にも担当を置いていたが、人員削減の影響で現在は担当を定めず対応可能な職員が担当している。また入学から卒業までを一職員が一貫して担当することを目指していたが、人事異動上の問題もあり、現在は拘らず柔軟に担当を定めている。最後に質問受付について、以前はFacebookでも受け付けていたが現在は運用を終了しており、質問は対面、電話、メールの他、Webフォームから受け付けている。

4. レファレンス事例

本学は小規模大学ということもあり学生との距離が近く、カウンターでの気軽な会話をきっかけとした質問も多い。過去に対応した学生から、その後の状況を気軽に報告してもらえるのは職員として嬉しい点である。こうした会話をきっかけにサークル関連の展示が実現する等、図書館と学生相互の信頼に基づく関係が新たなサービスに繋がっている。

本学ならではのレファレンス事例というと難しいのだが、小樽の歴史や本学沿革、卒業生に関する質問、例えば「小林多喜二、伊藤整の卒論に関する質問」「高濱年尾の句碑建立の年月」等が寄せられている。

ここで、利用者からの問合せをきっかけに「本学図書館の謎」を解いた事例をご紹介します。図書館西玄関の壁にヒポクラテスの言葉「ARS LONGA, VITA BREVIS」(ラテン語訳)が掲示されているのだが(図1)、経緯を尋ねられても確たることが言えない状況で



図1 図書館西玄関の左右にある「ARS LONGA VITA BREVIS」(2024年5月撮影)

あった。これについてはまず、過去の図書館概要で昭和54年に正面玄関（現在の西玄関）に掲示と確認した。続けて、当時の図書館長がこの言葉について書かれている文章³を発見。事情をお尋ねする手紙を送り、当時の図書館長による提案で掲示されたものと判明した。

手紙と聞くと一昔前の出来事と勘違いしそうになるが、この調査時期は2019年である。担当者からは、当事者と直接手紙をやりとりできた嬉しさが印象に残っていると聞いている。本調査で思いがけず自館の歴史に触れることになったが、資料にあたることのみがレファレンスの醍醐味でないことがわかる。

5. おわりに

ここまで本学のレファレンス事例をご紹介した。冒頭で苦手意識を告白したが、己の技量、閃きを磨きながら、利用者の次の一步を支援できる、図書館職員ならではのやりがいと成長を感じられる業務と感じている。書架の間に籠るのみならず、利用者と密にやり取りをし、調査先関係者との関わりも起こり得る、他業務にはない魅力的な一面がある。

「ARS LONGA, VITA BREVIS」－生命は短く、学術は永い⁴。自分の回答がいつか巡り巡って、利用者による新たな知見、術の要素

となるかもしれない。今後も利用者に寄り添った支援ができるよう研鑽を重ねていきたい。

参考文献

- 1) 久保田壮活. 小規模大学図書館における新たな学習支援体制の試み－小樽商科大学附属図書館クラスライブラリアン制度－. 大学図書館研究. 2014, 101, p1-5. <https://doi.org/10.20722/jcul.250> (2024-06-11 参照)
- 2) 小樽商科大学附属図書館クラスライブラリアン <https://library.otaru-uc.ac.jp/librarian/> (2024-06-11 参照)
- 3) 長谷部亮一. 古典のことば. 砧通信. 1985, 14, 表紙裏.
- 4) ヒッポクラテス. “箴言”. 世界の名著9ギリシアの科学. 東京, 中央公論社. 1972, p215.

(このの・ゆかり／小樽商科大学)

**レファレンスサービスを図書館業務として利用者に印象づけるために
－久留米大学医学図書館で取り組んできたこと－**

後藤 可奈子、平山 紀子

1. はじめに

久留米大学（以下、本学）は、6学部・14学科と大学院に4研究科をもち、医学部の旭町キャンパスに医学図書館、文系学部の御井キャンパスに御井図書館があり、各キャンパスの状況にあわせた運用をしている。医学図書館（以下、当館）は現在館員8名（管理職2名、嘱託職員6名）で運営しており、主な利用対象者は、旭町キャンパスの学生約1,500名及び教職員約4,500名である。本稿では、特に医学部の3学科（医学科・看護学科・医療検査学科）の学生と旭町キャンパスの教職員に向けてレファレンスサービスを知

ってもらうために取り組んできたことについて紹介する。

2. 利用者の図書館へのイメージ

当館では「医学図書館ニュース」を発行¹⁾しており、教員にエッセイを寄稿してもらっているが、「昔は図書館に足を運んだが、今は電子ジャーナルしか利用しないため図書館は使っていない」といった内容をよく目にする。利用者にとって図書館は蔵書の収集のイメージが強く、レファレンスサービスの認知度が低いことがうかがえる。実際、「お仕事中にお邪魔してすみません」と断られて、文献の探し方を聞かれることがよくある。

3. 学生へのアプローチ

学生に図書館を使ってもらうには、教員に授業で図書館を使う課題を出してもらうのが近道ではないかと考え、まずは医学部の教育について知りたいと考えていたところ、医学部の模擬患者会（以下、SP会）を見つけ、活動することにした。SP会については別稿²⁾で書いているが、そこで出来た教員との繋がりで2020年度より看護学科の2・3年次の必修科目「研究」の文献検索の授業のコマを担当できるようになった。

新入生向けの図書館ガイダンスで、OPAC検索で蔵書を探せることは分かっても、実際の所在の見方が分からず、欲しい資料にたどり着かないという利用者は多い。前述の看護学科の文献検索の授業では、医中誌 Web をメインに講義と演習をしているが、前提としてOPAC検索について理解していることが必要である。持ち時間30分の図書館ガイダンスでは伝えきれないため、別途、教員に相談し、2021年度から1年次の授業の空きコマで全員PC演習ができるよう調整した。

4. 教職員へのアプローチ

主に医局秘書や院生を対象にデータベース

の使い方の案内をしていた「ミニミニ講習会」を2020年度より「文献検索講習会」としてリニューアルした。案内チラシや口コミの効果で現在は医師やコメディカルの参加者が多く、講習会の内容も参加者の要望を取り入れ、文献検索のみならず文献評価指標の見方や文献管理ツールの利用案内なども行っている。講座への出張講習会や研究グループ単位での申し込みもあり、診療ガイドライン作成が目的ということもあった。また、最近は看護研究の前に受講する看護師も増えてきた。文献検索講習会という名の予約制レファレンスと感じるほど、具体的な検索テーマをもって受講する利用者も多い。

文献検索講習会やレファレンスが学内で少しずつ認知されることで、研修医・看護師の新入職員オリエンテーションや指導医の研修プログラムの中で文献検索の部分の講義を担当させてもらえるようになった。

5. 利用者マニュアルの整備

当館では平日夜間と土日は警備会社に窓口業務を委託しており、レファレンスは平日の日中のみ受け付けている。病院職員など平日に図書館を利用できない利用者も少なからずいるため、図書館 Web サイトにオンラインレファレンスフォームと利用ガイドを用意している。従来の利用ガイドを短時間で把握できるよう改訂したクイックガイドも公開した。医学図書館ガイダンスとデータベース利用ガイドは新たに動画も作成し、講習会等でも掲載場所を紹介している。学内限定公開のマニュアルは、学生向けに電子シラバス、教職員向けに教職員専用サイトに掲載している。

6. 医学図書館員としてのスキルアップ

著者の入職当時は、診療ガイドラインの文献検索の相談があっても、対応できる職員がないという理由で断っている状況であっ

た。そのため文献検索支援を含むレファレンス対応ができる職員を配置したいという当時の館長の意向があり採用された背景がある。現在レファレンスを主に担当している著者2名は前職が医系でない短期大学図書館勤務だったため、医学図書館協会が主催する初任者向け研修会³⁾をはじめ、医系図書館員として必要な知識を得るために各種研修会に参加するだけでなく、他館の有志と会を立ち上げ⁴⁾学ぶ機会を作り、試行錯誤しながら現場で実践してきた。診療ガイドラインの文献検索は図書館業務として広く学内に周知するには至っていないが、検索式の提案というスタンスで依頼者と相談しながらすすめている。

7. まとめにかえて

医学図書館の利用者の相談内容は専門的な事項も多く、医学用語を調べながら対応することもしばしばで、回答内容に自信がもてないこともある。しかし自信をもって回答出来るようになってから対応しようと思っただけではいつまで経っても出来るようにはならないとも感じている。今後も日々のレファレンス業務を通して利用者の信頼を得ることで、学習や研究を支える図書館としてのプレゼンスを高めていきたい。

参考文献

- 1) 「久留米大学医学図書館ニュース」
<https://medlib.kurume-u.ac.jp/information/medlib-news/> (2024-06-15 参照)
- 2) 平山紀子, 模擬患者 (SP) の活動を通して, 医学図書館 69 (4) p.209-210, 2022.
- 3) JMLA コア研修 <https://jmla1927.org/core.php> (2024-06-15 参照)
- 4) 平山紀子他, 九州・沖縄 EBM 勉強会の立ち上げについての事例報告: JMLA-CE コース認定を受けて, 第5回 JMLA 学術集会プログラム・抄録 p.9, 2021. https://jmla1927.org/doc/pub/gakujutu/5th_meeting.pdf (2024-06-15 参照)

(ごとう・かなこ、ひらやま・のりこ／
久留米大学医学図書館)

医学系図書館における 文献検索相談 —研究者と図書館員の接点を考える—

諏訪 敏幸

1. 「利用者が来ない」

看護学・医学系研究者（教員・院生・医療者）の間には、文献検索の教育や相談への要求が広範にある。筆者は図書館退職後、各地の研究者を対象に、こうした要求に応える活動を続けている。その際、相談者の所属機関に医学図書館や病院図書室があれば、そこにも相談に行くよう勧める。今後を考えるなら身近な図書館にいつでも相談できるのが望ましいからである。しかし一部の大学を除いて研究者の反応は必ずしも芳しくない。他方で図書館員の側からも、「利用者層が広がらない」という悩みを聞くことがある。検索相談への強い要求にもかかわらず、それはなぜ研究者の行動へとつながらないのだろうか？

2. 研究者の視点

医学は研究におけるアウトソーシングが比較的盛んな分野である。統計・遺伝子解析・培養など、必要に応じて研究者自らも技術を身に着けるが、手に余れば外部の専門家に指導と協力を仰ぐ。看護学では（医学でも）文献検索がそのような位置にある。問題は頼れる外部専門家が手近にいるかどうかである。

客観的に見て文献と検索に関して図書館員は専門家であり、他にその役割を果たせる者はない。図書館の専門的役割が認知されれば研究者は検索の相談に来る。だが研究者たち

は、図書館を専門的機関と認識するものの、専門性のなかが何か、図書館員はそれに責任を持てるのかなどの点では、具体的なイメージを持っていないように見える。

これは検索講習やサイトを通じて図書館が自らの専門性をどうアピールするかにもおそらく関係している。外からプロバイダを招いての検索講習ばかりだったり、表面的な製品紹介やトリセツのような情報しか発信されていなければ、むしろ「図書館には文献検索の専門的知識はありません」という逆向きのメッセージとして受け取られるかもしれない。

3. 現場での対応

だがどんなに宣伝したところで、研究者はみな忙しく、それだけの価値が期待できなければ図書館まで足を運んで時間を割くには至らない。価値があるかどうかは実際に相談してみればわかる。周囲の誰かが実際に経験してどうだったかで、評価は左右される。つまりたとえ少数であれ相談者が図書館の窓口でどんな経験をするかが鍵となる。判断の基準は、愛想良い接遇ではなく一來訪者の不安を取り除く上でそれともたいせつだが一文献の専門家として図書館に何ができるかである。担当者が集中すべきことは、何がその相談者の利益になるか、そのため何をするべきかである。例えば相談者の知識が不十分だったり誤っているときに正しい知識を教えないのは、研究者から見て価値ある対応ではない。

4. なぜ相談か

文献検索はキーワードを入れれば答が出る自動販売機などではない。本質的には他人の仕事の集積である未知の文献世界へと、探索的に分け入ろうとする試みである。レファレンスはもともと個々人の要求への理解に基づく個別対応サービスとして生まれた¹⁾。その中でも相談業務は個別の要求への理解をもう一歩進め、さらに両者の協働へと深めたサー

ビス形態である。つまり文献検索相談は、主題の専門家である研究者と文献・検索の専門家である図書館員との、より深い相互理解に基づく共同の探索作業とすることができる。

専門家は専門家としての役割と責任から逃げてはならない。検索技術だけでなく、検索視点からの問題分析、他分野も含む学術的眺望の提供、相談者の自力での検索に向けた教育など、総じて図書館員に一日の長があり、そこには専門家として為すべきことがある。図書館員でなければ誰がするのだろうか？

5. 具体例など

ここまで、考え方の要点だけ総論的に述べてきた。実際の現場での相談業務のようすについては別の文献²⁾で、学部生を対象とした短時間セッションの例を示している。

在職時、院生6人から始まった文献検索相談は、やがて学生・院生間で話が伝わり、教員たちも「困ったら図書館へ」と指示するに至り急速に広がった。退職前には年1000件、15年間で累計6000件へと増えた。

※

念のため、私が専門家？と思われた方に。研究者から見て図書館員は、図書館員であるというだけで既に専門家です。真摯に要求を理解し、相談者との相互理解を築けば、研究者だけではできない仕事が必ずできます。

文献

- 1) 諏訪敏幸. 2006. サミュエル・グリーン
の「民衆図書館」: 1876年論文の28事例から見えるもの. 『情報化社会・メディア研究』
3, 85-96. <https://hdl.handle.net/11094/3378>
- 2) 諏訪敏幸. 2008. 相談サービス事例. その
2, 検索相談: インタビューと対話を中心に.
『医学図書館』55(4), 357-361. doi: 10.7142/
igakutoshokan.55.357

(すわ・としゆき／大阪大学)

熊本大学附属図書館におけるレファレンス協同データベース活用事例：調べ方マニュアルへの貴重資料関連情報の登録

廣田 桂

熊本大学附属図書館は、国立国会図書館が実施するレファレンス協同データベース事業（以下、「レファ協」という。）に2010年から参加し、データ登録を行っています。2022年からレファ協の調べ方マニュアルに貴重資料の利用に基づいたテーマを設定して登録しています。

1. 貴重資料の利用に関連する業務

熊本大学附属図書館には阿蘇家文書、細川家北岡文庫（永青文庫ⁱ⁾、松井家文書等の多数の貴重資料が収蔵されており、学術的な調査研究に活用されています。貴重資料の利用は閲覧・撮影・出版物への掲載・博物館等施設への貸出などに大別されます。令和5年度は閲覧・撮影273名4,596点、出版物への掲載34件51点、貸出10件93点の利用がありました。

貴重資料に関連する業務には、収蔵庫の環境整備、利用申請事務、資料の出納、事前・事後の状態確認等があります。博物館等施設への貸出時に行う事前・事後の状態確認は長時間に及びます。

利用申請を受けた後、資料によっては過去の掲載文献を調査する必要が生じます。特に貸出を行う際に、過去の展覧会で発行された図録に掲載された写真や解説が役立ちます。利用頻度が高い貴重資料は、複数の図録や文献を調査します。

利用申請事務を通して調査した結果は、資料の利用終了後に事務用ファイルに綴られ、事務室のキャビネットで保管されます。その後は、同じ貴重資料に対する利用申請がある場合には業務担当者によって参照されること

があるかもしれません。しかし、紙媒体で保存しているため、業務担当者が記憶していなければ、過去に同じ資料が利用されていたことに気づかず、同様の文献調査を改めて実施する可能性があります。

上記のような状況を改善するため、貴重資料の過去の利用履歴を可視化し検索しやすくすること、また、業務担当者だけでなく、貴重資料について調査したいと考える利用者への情報提供を目的として、レファ協へのデータ登録を行うことにしました。

2. レファ協に登録するデータ

レファ協の調べ方マニュアルに登録している貴重資料関連情報は、以下の2種類です。

(1) 展覧会図録への掲載情報

博物館等施設へ貴重資料を貸し出した後、図録への掲載を確認したら、展覧会ごとにレファ協の調べ方マニュアルに登録しています。博物館等施設の名称、所在地、会期、図録の書誌情報、貴重資料の掲載箇所等なるべく詳細に入力するようにしています。展覧会で用いられる資料の名称と、本学で使用している目録ⁱⁱ⁾上の標題が異なることが多いため、特に注意して両方の名称を入力します。また、本学で使用している資料目録番号が省略されることがあるため、本学独自の目録番号を必ず記載し、掲載されている貴重資料を同定できるようにしています。展覧会を担当する学芸員の方は、展覧会が開催される何年も前から丹念な資料調査を行い、展示の準備に取り組まれています。レファ協の調べ方マニュアルに展覧会と図録の情報を登録をしていることを学芸員の方にお伝えしたところ、大変喜ばれ、今後の調査研究に役立てることができると言っていただけました。

(2) 熊本大学プレスリリースに関連する情報

熊本大学に設置されている永青文庫研究セ

ンターでは、永青文庫資料・松井家文書等の熊本藩関係資料を対象とした研究が行われています。永青文庫研究センターが貴重資料の調査を元にした研究成果を発表する際に、熊本大学から報道機関・メディアに向けてプレスリリースが配信されることがあります。その際、大学の広報戦略室、永青文庫研究センター、図書館の三者が連携して準備をします。ニュース映像や新聞記事で貴重資料の画像を使用した場合には、放映や掲載に関する情報を図書館まで提供するように各社に伝えています。その結果、図書館には貴重資料がどのように報道されたのかというデータが集約されます。

レファ協の調べ方マニュアルには、プレスリリースで紹介された貴重資料そのものに関する情報、その資料が過去に掲載された文献情報、新たに掲載された文献情報をまとめて登録するようにしています。永青文庫研究センター教員の了承を得て登録しており、教員からは、大変ありがたいという言葉をいただいております。プレスリリースで取り上げられた貴重資料に対しては、研究者からだけでなく、報道を通してその存在を知った一般の方からも問い合わせがあります。レファ協へのデータ登録が関連資料の調査にかかる時間を短縮することにつながり、レファレンス業務を効率化できるのではないかと考えています。

3. 今後の取り組み

「レファレンス協同データベース事業データ作成・公開に関するガイドライン」には、「調べ方マニュアルデータは、特定のテーマ、トピックに関する調べ方を、特定の利用者グループのために編集した付加価値の高い情報です。データの作成にあたっては、「何について」、「誰のために」作成するのかを意識し、情報源を十分な時間をかけて幅広く確認し、評価することが必要となります。」と書かれ

ていますⁱⁱⁱ。今後は、入力したデータの評価とデータに関する本学独自のガイドラインを策定する必要があると思っています。また、過去に出版された図録等から情報を拾い出してデータを充実させていきたいと考えています。

参考文献

ⁱ 永青文庫研究センター Web サイト 永青文庫とは. <https://eisei.kumamoto-u.ac.jp/about/eiseibunko.php> (2024-06-19 参照)

ⁱⁱ 「熊本大学寄託永青文庫資料総目録」熊本大学文学部附属永青文庫研究センター, 2015

ⁱⁱⁱ レファレンス協同データベース事業データ作成・公開に関するガイドライン

3.2 調べ方マニュアルデータは、どのように作成するか https://crd.ndl.go.jp/jp/library/data/guideline/3-data_make.html#chap3-2 (2024-06-19 参照)

(ひろた・けい／

熊本大学教育研究支援部図書館課)

大学図書館の入館ゲートに関する 照会とその回答まとめ

上村 順一

1. はじめに

業務上必要になったため、筆者が参加した大学図書館職員長期研修の同期生及び大学図書館研究会員を対象に、入館ゲートの認証の有無及びその認証方法について照会しましたので、結果を報告します。

2. 現況

筆者は琉球大学附属図書館に所属しています。琉球大学及び本学附属図書館の概要については、会報『大学の図書館』2024年3月号に、本学のデジタル教科書・電子黒板の導入についての報告をした際に記載しております。ので、お手数ですがそちらをご参照ください。

本学は、本館と分館の2つの図書館によって成り立っています。本館は平成28(2016)年に改修工事を行った際、入退館ゲートを更新し、現在に至ります。対して分館は、昭和59(1984)年に開館して以来、入退館ゲートはあるものの、認証機能を有しておらず、物理的な扉のみが設置されている状況です。

本館の入退館ゲートは、学生であれば学生証の、教職員であれば職員証の、それぞれ記載されたOCR数字を読み込み、図書館システムに当てて入館可否を制御する、というシステムになっています。なお、貸出・返却も、OCR数字を読み込んで手続きをしています。唯一、自動貸出装置のみ、磁気ストライプを用いています。

3. 調査に至った理由

前述の本館の入退館ゲートは、設置から10年近くが経過し、そろそろ更新時期に当たること、また分館は、令和7(2025)年1

月から4月にかけて、西普天間地区に移転を予定しており、同地区に新規に入退館ゲートを設置することから、他館の入退館ゲートの状況、特に認証の有無、並びに認証している場合はその方式について情報収集をすることにしました。

もっと言うと、本学のOCR数字を読み込んで入館を制御している、という方法が、筆者自身、初めての経験で、どのくらいrareな認証方法なのか、というのを知りたかった、ということがあります。

4. 情報収集の手法

なんとなく状況が把握できればよいかな、とも考え、お手軽に回答できることを第一に考えました。

それを踏まえ、照会先として、筆者が参加した大学図書館職員長期研修(いわゆる長研)41期の同期生30名余が参加しているメーリングリスト、ならびに大学図書館研究会員が参加しているメーリングリスト dtkML に向けて、入館時の認証の有無、認証している場合はその方式について、お伺いしました。

なお、認証は入館時に限った機能と限定しました。その方が回答数を見込める、と考えたからです。退館時の認証は敢えて今回の調査外としました。

5. 情報収集の概要

長研同期向けには2024年5月9日(木)から、大図研会員向けには2024年5月14日(火)から、それぞれのMLに向けて回答依頼をお願いしました。そして、回答 form は2024年6月27日(木)に閉鎖しました。

当初は、[気心知れた長研同期であることもあって]メール本文に回答する形式で、筆者がちまちまExcelに落とし込んでいたのですが、集計が大変になったこともあり、中途から私物のgoogle form (<https://forms.gle/DCwDz1VPqQpTLvLPA>) を用いて回答を

お願いしました。メールで回答があった分に関しては、筆者が代行して回答を入力しました。

回答 form は既に閉鎖していますが、もし form そのものをご覧になりたい方は、筆者までご一報ください。一時的に form を再公開します。

質問項目としては、

①大学名

- ・分館等がある場合は可能な限り設置単位で回答

②何らかの認証がある入館ゲートの有無

③前項が有の場合、複数回答ありで以下から選択

- ・(Felicaに限らない) IC カードで認証
- ・磁気ストライプ (= カードの磁気中に記載されている ID) で認証
- ・バーコードを読み込んで認証
- ・OCR で ID を読み込んで認証
- ・(アプリ等で表示される) QR コードを読み込んで認証
- ・まさか (失礼) の顔認証
- ・その他

としました。

2024 年 6 月 27 日 (木) 現在までに、延べ 72 個の回答を得られました。回答のしやすさを鑑み、敢えて同一の大学からの回答 (が問 1 の回答に該当します。) も受け入れるような設定にしたので、それらを補正した結果、回答総数としては 68 館となりました。内訳は、国立大学 46 (67.6%), 公立大学 4 (5.9%), 私立大学 18 (26.5%) です。

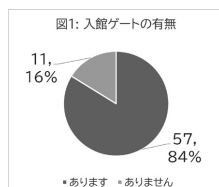


図1

6. 情報収集の結果

問 2 (入館ゲートの有無) の結果を図 1 に、問 3 (入館ゲート有の場合の認証方法) の結果を図 2 に、それぞれまとめました。なお、問 3 の「その他」は 3 回答あったのですが、カウンターが有人 / 無人等の、別に条件分岐が必要な回答内容でしたので、選択肢に該当するものは当該選択肢の値を追加して、「その他」なしとして処理しています。

7. 結果を踏まえた私見

問 2 に関して、入館ゲートがないという大学図書館がそこそこ (16%) ある、という事実がやや意外でした。もっとも、筆者が勤めた大学図書館でも、メンテナンス性やランニングコストのことを鑑み、ゲートなし (BDS のみ) というところもあったので、ゲートなしそのものは珍しくなかったものの、そんなにあったのか、と感じました。

また問 3 は、複数回答可としたので、パーセンテージは敢えて算出しませんでした。IC カード認証がここまで (「入館ゲートあり」の 57 館を母数とすると 66%) 普及しているのか、というのが偽らざる感触です。もっとも、IC カードは、一般財団法人 FCF 推進フォーラム (<https://fcf-forum.jp/index.html>) という団体があり、そこで、Felica の学生証のフォーマットが定められているから、かもしれません。一方で、磁気ストライプを用いた認証もまだまだ多く、やはり基盤整備にはそれなりの経費がかかるからな、と独り納得しているところです。

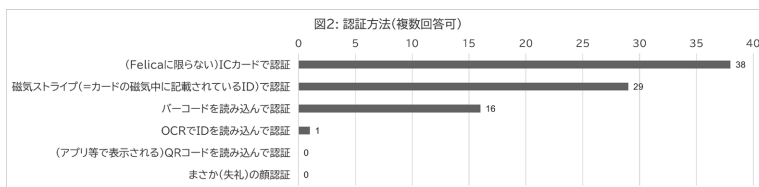


図2

8. おわりに

『日本の図書館：統計と名簿』2023によると、日本の大学図書館数は1,482館とのことです。すなわち、N=68では、わずか4.6%にならず、何の根拠もない値であるかもしれません。しかし、なかなかに興味深い結果が得られたと合点して、結果を公開することにしました。

なお、この照会に当たっては、先行研究調査はしていないも同然で、一応、CiNii Researchで、「ゲート」「認証」のand検索はしてみました。結果、nohitとは申しませんがそんなに数はなかったのです。調べ方がアホなだけの予感。その観点からも、今回得られた情報はそれほど信憑性はない可能性が高いです。

そして、本学図書館の現行のOCR認証というのが、いかに激rareであるか、また、本学は敢えてsourceを貼りませんが、学生証をスマホアプリで運用することを決定し、将来的には、本館入館ゲートは、選択肢の「QRコードを読み込んで認証」に移行する予定です。すなわち、激rareから激rareに移行しようとしていて、(N値が少ないので信憑性は疑問符がつくとはいえ)若干の戦慄を覚えています。大丈夫なんだろうかと我々。

ともあれ、dtkMLでお送りした回答お願いに対し、快くご回答くださいました会員に、深謝申し上げます。ありがとうございました。

(うえむら・じゅんいち／

琉球大学附属図書館)

junluemr@jim.u-ryukyu.ac.jp

第31回大図研オープンカレッジ 参加報告

磯崎 みつよ

本記事は、昨年度(2022/2023年度)に開催された大図研オープンカレッジ(DOC)の報告です。掲載が遅くなりましたこと、お詫び申し上げます。(研究企画委員会)

2023年5月20日(土)10:30~12:00にオンライン会議システム(Zoom)を用いてオープンカレッジが開催された。テーマは「高校情報教育から考える情報リテラシー教育」、講師は筑波大学図書館情報メディア系助教の小野永貴氏、参加者は40名程であった。本稿ではその概要をお伝えする。

1. はじめに

講師は高校教育にも携わった経験を踏まえながら、講演の趣旨について話された。昨今の高大接続において、学校図書館と大学図書館には館種の違い等から隔たりがあり接続がうまく機能していない。そこで情報リテラシーの育成という共通した目標があることに着目し、今後の相互理解や情報共有のヒントとなるような提言をしていきたいと述べられた。

2. 高校までの状況

まず学校図書館の現況について。文科省統計から多くの学校で情報機器やICT環境が十分に整備されておらず¹⁾、GIGAスクール構想等の施策でも図書館が情報センターの中核としての位置付けが弱く、図書館が読書・国語教育の場という認識もあること等の実態が取り上げられた。

次に、高校の教科「情報科」の誕生と変遷について。情報リテラシーは海外では1980年代から議論があり、日本も情報社会になり1997年に情報教育の3つの柱が掲げられた。2003年に「情報科」が誕生したものの、専

任教員の不足や未履修問題が起きたりした。授業ではパソコンの操作に時間が割かれやすく、図書館が情報活用の実践力を育む場として期待に応えることができにくかった。それには図書館情報学分野よりも情報処理分野が情報処理に影響を与えてきたという歴史的経緯があったからだと述べられた²⁾。

3. 探究的な学びとアカデミックスキル

最近の動向として、新学習指導要領（2018年告示）による必修教科目「情報Ⅰ」の開始や、2025年度の大学入学共通テストで「情報」の新設がある。さらに今回の改訂（2018年告示）で「探究的な学び」が全校種・教科で位置付けられた。これらは情報リテラシーの観点で大いに注目すべきである。それは高校での「探究のプロセス」を通して得る学びが大学入学後のアカデミックスキルの獲得や研究能力の向上に資する可能性が広がったからだ³⁾。とは言え、新たな「情報科」や「探究」を誰が教えていくのかという課題はあるが、この二つを繋ぎ中核を担うのが図書館ではないかとも述べられた。

次に、情報リテラシーの今後の予想について。今まさに情報教育でも探究でも過渡期にあたり、高校での履修にバラつきがあるため、大学では、今後数年間、未成熟な学生の基礎レベルを底上げする機能と初年次から高い研究意欲を持つ学生を更に引き上げる機能の両面で効果が期待されている。よって、高大接続を図って初年次生向けにガイダンスを習熟度別に開催する等の工夫が必要であろうと述べられた。

4. 個人的な感想にかえて

筆者にとって印象に残ったところを二つ上げると、一つ目は、質疑応答で、参加者からの「情報活用がうまくいく要件は？」の問いに、講師が「設備や蔵書の立派さに目を向けがちだがコーディネーター役となる司書教諭や学校司書等が配置され教育課程といかに繋がるかが目には見えにくい的大事である」と

回答され、当たり前なのに真摯に向きあわねばと痛感した。二つ目は、発展学習のために国際バカロレア教育が紹介され、情報リテラシーにおいて剽窃が何故いけないのかを他者の著作物を尊重する学問的誠実性で語られている⁴⁾ということを知ったことである。この講演を通して、情報リテラシー教育の背景にあるものを整理することができて参加して良かったと思う。今回の学びをガイダンスやレファレンスはもちろんラーニングコモンズや書架の構築等、現場での議論に活かしていきたい。最後に、このような学ぶ機会を頂戴することができ、講師、研究企画委員会、事務局および参加者の皆様に感謝申し上げる。

参考文献

- 1) 文部科学省. 学校図書館の現状に関する調査（結果 p.11 (PDFp.15)）https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/dokusho/link/1410430_00001.htm（参照 2023-05-20）
- 2) 小野永貴. 大学の一般情報教育と接続・統合した情報リテラシー教育. 情報の科学と技術. 2017, vol. 67, no. 10, p.539-545
- 3) 小野永貴. 情報入試を越えた情報教育の高大接続に向けて. ニューサポート高校情報. 2022. vol.19 (2022年春号), p.2-3 https://ten.tokyo-shoseki.co.jp/ten_download/2022/2022048230.htm（参照 2023-05-20）
- 4) アンソニー・ティルクほか. 国際バカロレア教育と学校図書館. 学文社, 2021

（いそざき・みつよ／東京地域グループ）

第55回全国大会のお知らせ

第55回全国大会実行委員会

第55回全国大会は、現在参加申込受付中です。

第55回全国大会は、2024年9月21日（土）～22日（日・祝）の日程で、オンライン形式（Zoom）にて開催されます。

全国大会の最新情報は、全国大会ウェブサイト（<https://www.daitoken.com/conf2024/>）で案内しています。各プログラムの最新情報や詳細な内容は、全国大会ウェブサイトに随時、追加しています。最近の更新を知りたい方はメニューより「更新履歴」をご確認ください。各プログラムの詳細情報へは、「大会日程」からリンクしています。また、全国大会X（旧 Twitter）アカウントでも情報を発信しています。

ご参加にあたっては、メニューの「参加申込」からリンクするオンラインチケットサービス「Peatix」より、手続きをお願いします（<https://daitoken-zenkoku-55.peatix.com/>）。参加申込締切は、2024年9月11日（水）17時です。申込締切日以降のお申込みはできません。

お申込み方法など、ご不明な点がございましたら、お気軽に全国大会実行委員（taikai@daitoken.com）までお問い合わせください。

実行委員会では、会員の皆様のご参加をお待ちしております。また、非会員の方もご参加いただけますので、大図研の活動や大学図書館を巡る状況に関心をお持ちの方にお声かけいただけると幸いです。

実行委員会一同、多数のご参加をお待ちしております。

自主企画を募集しています

自主企画とは、会員が自主的に企画するイベントのことです。オンラインならではの企画も歓迎いたします。開催内容、開催方法についてのご相談もお待ちしております。

■開催日時：2024年9月22日（日）シンポジウム終了後 16:30-17:30（予定）

■開催場所：Zoomを使用したオンライン形式

■応募・問合せ先：全国大会実行委員会（taikai@daitoken.com）までメールでご連絡ください。

件名の先頭には、必ず「■自主企画■」と明記の上、次を記載してください。

(1) 担当者名と連絡先メールアドレス (2) 企画タイトルと概要 (200字程度)

※同時時間帯での開催希望が多数の場合は、事前に調整する場合があります。また、運営者ご自身でZoomのアカウント等を取頂いただく可能性もございます。オンライン開催に伴う機材はご自分でご用意ください。

大学の図書館 第43巻第7号 (No.608) 2024年7月25日 (毎月25日発行) ISSN : 0286-6854
編集・発行 : 大学図書館研究会 年間予約購読料 : 送料共6,000円

□大学図書館研究会出版部 (出版物購入・問い合わせ窓口)

〒305-0033 茨城県つくば市東新井10-1-111 マザータンク気付

E-mail : shuppan@daitoken.com

<出版物購入代金等振込先> 三菱UFJ銀行 越谷駅前支店 普通口座 : 1403054 大学図書館研究会出版部

□大学図書館研究会事務局

〒105-0013 東京都港区浜松町2-2-15 浜松町ダイヤビル2F

E-mail : dtk_office@daitoken.com

<会費振込先> ゆうちょ銀行 振替口座 : 00190-2-79769 大学図書館研究会

新年度に係る会員へのお知らせ

大学図書館研究会は、無事に新年度、2024/2025年度を迎えられました。ひとえに、会員各位のご尽力の賜物です。

新年度を迎えるに当たって、会員各位に事務的にかつ重要なお連絡を3点、お知らせします。

1. 会員情報調査へのご回答御礼

ご多忙のところ、会員情報調査へのご回答、誠にありがとうございました。約8割の会員からご回答を頂戴し、会員名簿に反映することができました。御礼申し上げます。

なお未回答の会員へは、事務局組織担当から個別にお伺いいたします。引き続き、ご協力をお願い申し上げます。

2. 会員情報交換メーリングリスト dtkML の更新ご報告

会員情報調査で寄せられた情報を元に、会員情報交換メーリングリスト「dtkML」の更新を行いましたので、お知らせいたします。

3. 「会員専用ページ」のID/パスワード変更ご連絡

本会報2024年4月号で告知しましたとおり、dtkMLを通じ、「会員専用ページ」へアクセスするためのID及びパスワードの情報をお送りいたしました。

本年度からははがきは送付しませんのでご注意ください。

なお、この情報が配信されていない会員は、dtkMLに搭載しているメールアドレスが誤っている可能性があります。事務局ML担当 mailmaster@daitoken.com、もしくは事務局組織担当 soshiki@daitoken.com までお知らせくださいますよう、お願い申し上げます。

(大学図書館研究会事務局)

議事要録

2023/2024 年度 第9回常任委員会

日時 : 2024年6月23日 (土) -2024年6月

29日 (土)

場所 : メール審議

出席者 (敬称略) :

呑海, 赤澤, 上村, 有馬, 北川, 小山, 和知 (以上, 常任委員), 青山, 磯本, 澤木, 中筋, 渡邊 (以上, 常任 (特定) 委員)

◆議事の詳細は以下からご覧ください。

<https://www.daitoken.com/committee/>